

談話室 第九回

ブラック・ジャック の法哲学(後篇)

閑居小人

ブラック・ジャックは法外な金額を手術の報酬に要求するが、じつはお金への執着は甚だ薄い。むしろ恬淡^{てんたん}としている。

前回に触れたように、相手が虚栄心をすてて人間として裸の心を示せば、たいていの場合、その要求をひっこめていく。彼の鋭い眼光は、お金ではなく、依頼人の「まごころ」の有無、真剣さの有無に向けられている。それを探り当てるために必ず一度はふっかけて容赦しない。

ブラック・ジャックは実は獣医でもあって、人と区別せず、イルカ、シャチ、小鳥、クマ、サル、イリオモテヤマネコなど、数多くの動物を治療している。子どもと豊かな心の交流をもつことも多い。これはそこに嘘の入り込む余地が少ないということと関係しているであろう。

そう、ブラック・ジャックは、法外のたちばに立って、この世の嘘と不正を明るみに出す存在なのだ。

本来同じいきみものであるのに、万物の霊長などとおごっている人間。懸命に生きる野の動物にくらべて、

のうのと生きながら不平ばかりいう人間。

ほんらい区切りなどないはずなのに国境あるがために生ずる戦争。

みんな裸でうまれてきたはずが生じている貧富の差とおおらかどころではない金への執着。

ほんらい人は平等であるはずなのに生れている上下の力関係。人の上下が人品に適っているならまだしも往々は正反対である醜い現実。

人はそれぞれ独自の「顔」をもっているはずなのに、それを消し去ろうとする「組織」というもの。

ほんらい率直にうまれついているはずの心を虚栄とごまかしで飾る人間の弱さ。

ほんらい睦み合って生きるべき親子きょうだい夫婦であるはずなのに、他人以上に冷え切った人間関係。

そして、本来お金に代えられるはずのない命につけられる値段の「相場」。

ブラック・ジャックはしばしば裁判の席に立たされている。これはなぜか。

理由はこの虚飾にみちた人の世を彼一人で敵に回しているためである。かれは普段この世の不義に対しては傍観者としてクールに接しており、それがこの漫画のえもいわれぬ魅力になっているのだが、内心は怒りの

念を燃やしているため、時に隠しきれず、法で守られた世間の人びととの争いに巻き込まれている。しかし、けっして徒党は組まず、政治活動をしたりはしない。彼は徹底して個人の人である。

「団体とか運動とかにはカカワリを持たない夕チでしてね」

小学校と医大を中心に、彼の母校同窓会への出席率は高率である。いかに厭なやつがいようと、個人の縁でつながった人びとに彼はふしぎと義理固い。親子きょうだい夫婦ともだちのあいだに求める愛情も、殆ど「一心同体化」願望といえる程に、はなはだ濃厚であって、古風ですらある。

《父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ、朋友相信シ》

ブラック・ジャックの医療行為は科学的地から様々の批判がなされている。彼は好んで他人からの皮膚移植を患者に施したが、実際には拒絶反応から定着しない。

しかし、もしそれが叶うことならば、皮膚を通じた人間どおしの善意のつながりが、人びとにも強く実感されたことだろう。ブラック・ジャックはお金にならぬ研究をきらったが、彼に医者として固有の研究テーマがあるとすれば、移植の免疫学を措いて外にない。

ブラック・ジャックの一連の態度

や行動の背後には、幼時のじぶんに瀕死の重傷を負わせ、母をも殺した人びとへの復讐心が隠されていることになっている。が、断片的に語られるにとどまり、全容が明らかになることは遂にない。

昭和四十八(一九七三年)に連載を開始した本作がなければ、手塚治虫の名前が真に偉大となることはなかったであろうとさえいわれる。この作品がそれほどまでに成功した理由の一つはその形式に求められよう。

一話完結式の短編なので、一話一話に金言の如き「教え」がある。少年漫画とはいいながら、主人公は読者層より一回りもふたまわりも成熟したオトナの男であるため、少年読者は一段上の「教えを受けて」成長させられた気分を味わうことができ。一話一話は断片であるため、知りきることのできない秘密の余韻もつねに残されている。

読者の仰ぐべき「師」はひとりブラック・ジャックのみならず、敵対者のドクター・キリコや、恩師の本間丈太郎など複数あって、単純にどれが正しいと割り切ることもできない。

この独特の箴言^{しんげん}的リアリティが時代を超えて読者を獲得するふしぎな吸引力になっているものと思われる。